問1　「歴史学の存在そのものが、この巨大な領域に支えられ、養われている」（傍線部ア）とあるが、どういうことか、説明せよ。

教学社　東大の現代文25カ年
歴史学は事実かどうか画定できないあいまいで膨大な領域を前提として成立し、発展しているということ。48字

河合
歴史学は、事実かどうか学問的に画定できない出来事が無限に増殖する領域に依拠して、初めて学問として可能になるということ。59字

青本
歴史学は、記述することによって歴史を画定しながら、同時に事実として記述されなかった膨大な領域を前提に成立するということ。60字

赤本
歴史学は過去の記憶や記録だけでなく、記憶や記録がなされていない事柄までを含む膨大な領域を対象として成立しているということ。61字

旺文社
書くことで歴史を画定しようとする歴史学自体が、書かれなかった要素や可能的事象を含む膨大な前歴史的領域に根ざして成立していること。64字

学燈社
歴史学自体は確定された歴史をめざすとしても、その歴史を記述するためには、確定されない曖昧な無数の出来事の世界に依拠するしかないということ。69字

明治書院
歴史学自体が、書かれなかった要素や可能的事象を含むあいまいで膨大な前歴史的領域に依拠して成立しているということ。56字

代ゼミ
歴史学は、史料の有無や事実か事実でないかという境界を超えた広範な領域における神話や物語、伝承等に基づいて成立しているということ。64字

東進

出来事と記述とに画定されず、実在性さえ超越して曖昧に広がる広大な領域の情報を、神話や詩等を通じて得ることで、学問としての歴史学が存在し発展してきたこと。76字

現代文の解法

歴史学は、存在の有無を学問的に決められない無限の事象で構成される歴史の領域に依拠することで、初めて学問として成立し発展することができるということ。73字

問2　「歴史そのものが、他の無数の言葉とイメージの間にあって、相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージなのだ」（傍線部イ）とあるが、どういうことか、説明せよ。

教学社東大２５年
歴史とは、国や社会において、多くの記憶のひろがりの中から代表的な価値観によって中心化され、自己像を構成する言説や表象であるということ。67字

河合
歴史とは、様々な記憶のせめぎあいのなかで、たまたまその社会の代表的な価値観などに応じて生き残った言説や表象の一つにすぎないということ。67字

青本
歴史は、その社会において優勢な価値観によって恣意的に選択され、社会の成員の自己像を構成してきた記憶だということ。56字

赤本
歴史は国や社会の代表的な価値観によって恣意的に選択・構成され、その成員の自己像を作り上げてきた記憶であるということ。58字

旺文社
一つの歴史は、その主体である共同体の自己像を構成する代表的な価値観を中心に、それ以外の要素を排除する形で編み上げられた表象であること。67字

学燈社
歴史は、さまざまな個人や集団の記憶の中で、最も支配的な価値観として国家やその成員の自己像を構成してきた記憶に集約されるものだということ。68字

明治書院
一つの歴史は、その主体である共同体の自己像を構成する代表的な価値観によって中心化され、他の要素を排除する形で生き残った表象であるということ。70字

代ゼミ
歴史は社会の代表的な価値観によって成員の自己像を確立する働きをするため、他の言葉やイメージよりも重要なものとみなされてきたということ。67字

東進

歴史は、ある社会の代表的価値観に支持されて、その社会の成員の自己像を構成する際の言葉のイメージをめぐる闘争を制し、社会的に通用しているものであるということ。78字

現代文の解法

歴史は、各社会の代表的価値観に基づき、記憶の一形態としてその成員の自己像を構成する役割を通じて、無数の記憶同士の抗争の中で生き残った一つにすぎないということ。79字

問3 「記憶の方は、人間の歴史をはるかに上回るひろがりと深さをもっている」（傍線部ウ）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

教学社東大２５年
歴史は局限され等質化された人間の記憶にすぎないが、記憶自体は物質や遺伝子などにも存在するから。47字

河合
人間社会に即して中心化され等質化された歴史と比べて、記憶は物体や生体の至るところに刻み込まれた多様な情報までをも含むから。61字

青本
人間の記憶にもとづく歴史は局限されたもので、現実の中にはそれを越える物質的、生命的な痕跡としての記憶が残存するから。58字

赤本
歴史は局限された人間の記憶にすぎないが、記憶自体は情報や物質や生命などにまで及ぶ概念であるから。48字

旺文社
地球上における物質的・生命的連鎖の痕跡をも含めた記憶に対し、人間の歴史はそれらを特定の主観性に基づき限定することで成り立つものだから。67字

学燈社
人間の歴史は一定の方向に整序され局限された記憶にすぎないが、記憶そのものは物質や身体の次元をも含む混沌たる領域をなしているから。64字

明治書院
特定の主観性に基づき限定することで成り立つ人間の歴史に対して、地球上における物質的・生命的連鎖の痕跡をも含めた記憶は多様な情報を含んでいるから。72字

代ゼミ
歴史が人間と集団の記憶にとどまるのに対して、記憶そのものは情報媒体や諸物質、生命体の本質である遺伝子にまで及ぶ広範な概念だから。64字

東進

物質的なレベルまで広がり、量的にも膨大な記憶に対し、歴史は個人と集団が人間存在の制約下で、主体的、主観的に記憶しようとし、操作した範囲に局限されるから。76字

現代文の解法

人間集団の一定の価値観に基づき記憶が中心化され等質化された歴史と異なり、記憶自体は操作を受けない形態で物質や生命のあらゆるところに存在し、多様な可能性を想起させうるから。85字

問4 「歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている」（傍線部エ）とあるが、どういうことか、説明せよ。

教学社東大２５年
歴史は、記憶の集積として社会のすべてを形成し、その結果さまざまな形で個人の生を決定するということ。49字

河合
歴史が個人の記憶を集団の記憶へと統合し集積するものである以上、そのなかで生きる個人のありようの一切を規定することになるということ。65字

青本
歴史は、集団を位置づけている先験的なものとみなされることによって、個人の生を呪縛する構造を持つということ。53字

赤本
歴史は集団の記憶の集積として個人に直結し、個人の意識から身体に至るまで強制的に決定づけるということ。50字

旺文社
歴史は、それを形成して来た過去の人々の営みの集積としてある以上、個人の生に先立ち、それを規定するものとなるということ。59字

学燈社
歴史は個人がその中で生きざるをえない文化や制度の形成者であり、「私」という存在のあり方を規定する力として迫ってくるものだということ。66字

明治書院
歴史が、それを形成してきた過去の人々の営みの集積である以上、個人の生に先立ち、それを規定するものになるということ。57字

代ゼミ
歴史は様々な社会装置を通して個人のあり方を決定しており、人間の身体や感情、生死に至るまで生き方を強制する側面をもっているということ。66字

東進

歴史は個人から集団を貫通する記憶の集積として、現存の人の営為の所産に対する、さらにその成果の集積として個人の生そのものに対しての決定力、強制力を持つこと。77字

現代文の解法

歴史は、個人の記憶を要素とした集団の記憶の集積とされるため、その集団内の個人の生き様を多様な形で決定することになるということ。63字

問5　筆者は「それらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである」（傍線部オ）と歴史についてのべているが、どういうことか、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。

教学社東大２５年
歴史は無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡であり、それらに生を決定されるのは苦痛だが、今を生きる自分がそれらによって支えられていることを感じるのは喜びであり、自らの痕跡をも含めて次代へとつなげていく重大な責任を負っているということ。（119字）

河合
歴史は人々の記憶を統合するものであるがゆえに、かえってそこからこぼれ出た様々な異質性を痕跡として見出すこともできる。それを見つめ、個人が歴史から自由でありえたことと、歴史が個人を抑圧することとを歴史の両面として引き受けるべきだということ。119字

青本
歴史とは、共同体の支配的な価値観を中心に作られ個人の生を決定する一方で、個人の自由と抵抗なしには存在し得なかったものであり、人間は歴史から排除された記憶を見直し他者とのかかわりの中で新たな歴史を生み出す自由と困難と責任を負う、ということ。（119字）

赤本
歴史は個人と集団の記憶の中心化・集積として個人を決定すると同時に、その決定に抵抗して自由を求めた無数の他者の行為や声や思考などの痕跡にほかならず、そのような他者とつながることで喜びや苦しみを共有し、歴史を背負う重圧を実感するということ。（百十八字）

旺文社
歴史は、共同体の支配的価値観に基づき個人の生を決定付ける一方で、偶然や自由な選択の集積として形づくられたものでもあり、その中で生きる人間は、抑圧された可能性や異質な存在に向き合いつつ、新たな歴史を作り出してゆく困難と責務をもつ、ということ。（120字）

学燈社

歴史の中で生きることとは、今までに存在した無数の他者の生の痕跡や記憶をひきうけることであり、そこには、そうした記憶に連なることのできる喜びとともに、他者の記憶に規定されて生きざるをえないという事実に関わる苦痛や重さが伴うものだということ。（118字）

明治書院

歴史は、共同体の支配的価値観に基づき個人の生を決定づける一方で、偶然や自由な選択の集積として形づくられたものでもあり、その両面の中で生きる人間は、抑圧された可能性や異質な存在に向き合いつつ、歴史を作り出してゆく困難と責務を負う、ということ。（一二〇字）

代ゼミ

歴史とは個人と集団の記憶の総体を意味し、そこには他者の行為や思考とつながることによって歴史に参与する喜びや、歴史のもたらす強制力や決定力に支配される苦しみ、および記憶の集積としての重みを感じることなど、さまざまな主観性が伴うということ。118字

東進

歴史は、記憶の行為として出来事を記憶しようとした個人や集団の主体性や主観性を、また、決定力を有する存在たる自身に抗しながら同時に自身を構成している個人の自由を、我々に教えることで、生における苦楽と歴史を作る個人の責任の重みを痛感させること。119字

現代文の解法

人々の記憶の集積である歴史は、中心化される過程で無数の主体の記憶を排除するため、個人が自由に行動し選択しうることで、歴史からの一定の解放をもたらす一方個人を抑圧する歴史を作るという困難と責任を人間に引き受けさせるということ。112字

問6　a＝微妙　b＝局地　c＝脅　d＝維持　e＝犠牲

東大 2008年 1

出典 宇野邦一『反歴史論』〈第3章 歴史のカタストロフ《1 歴史を引き裂く時間》〉の一節。

要約 歴史は、書かれたことと書かれなかったことの間にまたがる曖昧で巨大な領域として存在している。また、歴史は個人と集団の記憶という行為を導く人間の主体性に支えられ、複数の記憶による自己像をめぐる戦いの中で形成されてゆく。そして、歴史の中で生きるとは、歴史の規定する力とその規定力から自由になろうとする個人の生のせめぎ合いを通じて、他者の記憶をひきうける喜びや苦しみを経験することである。

解法 【問㈠】直前部分の、歴史学が「あいまいな領域を」「排除しよう」とするのに対して、歴史自体は「画定することのできないあいまいな……領域」としてある、という対比を軸にまとめる。【問㈡】歴史と記憶の関係に触れた第四・五段落に即してまとめる。「無数の言葉とイメージ」については、さまざまな「個人と集団の記憶」間での「自己像をめぐる戦い」に即して、また、「相対的に勝ちをおさめてきた」については、「代表的な価値観によって中心化され」に即して記述する。【問㈢】直前部分の、人間の歴史が「局限され、一定の中心にむけて等質化された記憶の束にすぎない」のに対し、記憶そのものは「物質」や「遺伝子」の次元にも広がっている、という対比を軸にまとめる。【問㈣】段落冒頭のトピックセンテンスを後で解説するという文脈のパターン。したがって、直後の一文以下の同段落の内容を踏まえて記述する。特に、「個人の生を決定してきた」歴史の力をアピールすることがポイント。【問㈤】直前の一文の「歴史とは、無数の他者の行為……の痕跡」を踏まえつつ、それを引き受けることに伴う「喜び」「苦しみ」「重さ」を説明することが中心。「苦しみ」「重さ」については、歴史の規定力と、それから自由になろうとする個人の生のせめぎ合いを前提にして記述する。

解答 【問㈠】歴史学自体は確定された歴史をめざすとしても、その歴史を記述するためには、確定されない曖昧な無数の出来事の世界に依拠するしかないということ。【問㈡】歴史は、さまざまな個人や集団の記憶の中で、最も支配的な価値観として国家やその成員の自己像を構成してきた記憶に集約されるものだということ。【問㈢】人間の歴史は一定の方向に整序され局限された記憶にすぎないが、記憶そのものは物質や身体の次元をも含む混沌たる領域をなしているから。【問㈣】歴史は個人がその中で生きざるをえない文化や制度の形成者であり、「私」という存在のあり方を規定する力として迫ってくるものだということ。【問㈤】歴史の中で生きることは、今までに存在した無数の他者の生の痕跡や記憶をひきうけることであり、そこには、そうした記憶に連なることのできる喜びとともに、他者の記憶に規定されて生きざるをえないという事実に関わる苦痛や重さが伴うものだということ。（句読点とも118字）【問㈥】a＝散逸　b＝超越　c＝機会　d＝信仰　e＝矛盾

東京大学

一　やや難　出典　宇野邦一『反歴史論』〈第3章　歴史のカタストロフ　1　歴史を引き裂く時間〉の前半部分。

［要旨・構成］　記述された「歴史」は、記述されなかった出来事や可能的事象まで含めた広大な領域の中から、特定の価値観に基づいて選択・構成されたものだ。そうした一共同体の歴史あるいは人間それ自体の歴史を、人間以前の物質や生命の痕跡まで含めた「記憶」の一形態としてとらえ返すことで、歴史の過大な求心力から離脱することが可能になる。歴史は個人の生を規定する強制力をもつとともに、個人の自由な選択や偶然の集積として形づくられるものでもある。歴史を生きる人間は、無数の他者の生の痕跡に向き合いつつ自らの生を営み新たな可能性を生み出してゆく存在なのである。

着眼点　㈠、「この巨大な領域」の内容および「……排除しようとしても……支えられ、養われている」という関係について説明する。㈡、歴史は「言葉でありイメージだ（＝何らかの実体ではない）」という趣旨を理解した上で、「……勝ちをおさめてきた」とはどういうことかを考える。㈢、「記憶」に関する論は第四段落から。同段落「代表的な価値観」以外のものは〈負け〉た、ということである。〈代表的な価値観に基づく記憶としての歴史〉を〈そこから排除された記憶〉の視点から相対化した上で、さらに〈人間の歴史〉を〈それを超えた物質・生命の記憶〉の視点から相対化する展開。㈣、〈歴史は個人の生を規定する〉という趣旨を軸に、「歴史という概念そのもの」が「強迫的」なのはどうしてかを考える。〈現在〉からみて〈自分たちより先に存在するもの〉だから、〈従うべきもの〉のように思われるのである。㈤、例年通りの一二〇字記述。第七段落以降で述べられる歴史の二面性をおさえて「喜び」「苦しみ」を説明した上で、前半の〈書かれたことと書かれなかったこと〉〈代表的価値観とそれが排除した記憶〉といった趣旨をふまえて「無数の他者の行為……の痕跡」の意味するところを考えれば、（歴史を生きる人間が負うべき）「重さ」とは何であるかも理解できよう。

解答　㈠　書くことで歴史を画定しようとする歴史学自体が、書かれなかった要素や可能的事象を含む膨大な前歴史的領域に根ざして成立していること。

㈡　一つの歴史は、その主体である共同体の自己像を構成する代表的な価値観を中心に、それ以外の要素を排除する形で編み上げられた表象であること。

㈢　地球上における物質的・生命的連鎖の痕跡をも含めた記憶に対し、人間の歴史はそれらを特定の主観性に基づき限定することで成り立つものだから。

㈣　歴史は、それを形成して来た過去の人々の営みの集積としてある以上、個人の生に先立ち、それを規定するものとなるということ。

㈤　歴史は、共同体の支配的価値観に基づき個人の生を決定付ける一方で、偶然や自由な選択の集積として形づくられたものでもあり、その中で生きる人間は、抑圧された可能性や異質な存在に向き合いつつ、新たな歴史を作り出してゆく困難と責務をもつ、ということ。（一二〇字）

㈥　a＝散逸（佚）　b＝超越　c＝機会　d＝信仰　e＝矛盾

【解答・解説】

出典　宇野邦一『反歴史論』〈第3章　歴史のカタストロフ　1　歴史を引き裂く時間〉

(一)　パターンⅡ＋Ⅴ【具体一般化型】＋【指示語問題】

最大のポイントは「この巨大な領域」が指す内容＝「書かれたこと……ような領域」をいかにコンパクトにまとめるかということ。「支えられ」と「養われ」を比喩でない表現にきちんと言い換えることも必要である。さらになぜ傍線部のように言えるのか、その理由を補填したいところだが、解答スペースからは無理がある。

解答ポイント　①「この巨大な領域」が指す内容＝「書かれたこと……ような領域」をまとめる。②「支えられ」の言い換え。③「養われ」の言い換え。

注意点　「養われ」の言い換えを忘れないこと。

解答例

> 歴史学は事実かどうか画定できないあいまいで膨大な領域を前提として成立し、発展しているということ。

(二)　パターンⅡ【具体一般化型】

「勝ちをおさめてきた」という具体的な表現をどう一般化して言い換えるかがポイント。まず「ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され」との対応をおさえる。次に「勝ち」である以上、何と戦ったのか、その対象を解答に含める。

解答ポイント　①「ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され」との対応をおさえる。②戦った対象である他の「多くの記憶（言葉やイメージ）」について言及する。

解答例

> 歴史とは、国や社会において、多くの記憶のひろがりの中から代表的な価値観によって中心化され、自己像を構成する言説や表象であるということ。

(三)　パターンⅧ【置換型】

形式は理由説明問題だが、実質は「ひろがりと深さ」が何を指しているのかを答えさせる問題。

解答ポイント　①人間の記憶の「ひろがりと深さ」のなさを説明する。②「ひろがりと深さ」の意味するものを答える。

注意点　解答例では本文のまま「遺伝子」を用いているが、「物質」との兼ね合いから「生命」と一般化しても今回はよいだろう。しかし、この段落においても記憶装置のことを述べているのだから、一般化せずに「遺伝子」の方が適切である。

解答例

> 歴史は局限され等質化された人間の記憶にすぎないが、記憶自体は物質や遺伝子などにも存在するから。

(四)　パターンⅠ―①【圧縮型】

この段落全体が傍線部の説明になっている。いかにうまく圧縮できるかが問われている。

解答ポイント　①歴史＝記憶の集積として言語・制度・慣習などのすべてを形成している。②個人と集団との関係。③歴史が個人の生を決定すること。

解答例

> 歴史は、記憶の集積として社会のすべてを形成し、その結果さまざまな形で個人の生を決定するということ。

(五)　パターンⅡ＋Ⅴ【具体一般化型】＋【指示語問題】

まず「それら」という指示語をおさえなければならない。直前の「無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡」を指している。次に「喜び」・「苦しみ」・「重さ」の内容をそれぞれ一般化して説明していく。最後の「重さ」が最も難しい。

解答ポイント ①「それら」の指示内容。②「喜び」、すなわち自分が歴史の中に存在することの説明。③「苦しみ」、すなわち歴史に自分の生を決定されることの説明。④「重さ」、すなわち歴史を支えていることの説明と、それにともなって生じてくる責任の重さにも言及する。

解答例

歴史は無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡であり、それらに生を決定されるのは苦痛だが、今を生きる自分がそれらによって支えられていることを感じるのは喜びであり、自らの痕跡をも含めて次代へとつなげていく重大な責任を負っているということ。（一一九字）

㈥【漢字】

解答

a	b	c	d	e
散逸（散佚）	超越	機会	信仰	矛盾

国　語

第一問

出典

宇野邦一（うの・くにいち）『反歴史論』（せりか書房二〇〇三年五月刊）の〈第3章　歴史のカタストロフ〉「1　歴史を引き裂く時間」前半部。

宇野邦一は一九四八年松江市生まれ。京都大学文学部卒業後、パリ第8大学で学ぶ。現在、立教大学教授。現代フランス文学思想専攻。著書には、『意味の果てへの旅』『他者論序説』他、訳書には、ドゥルーズ『フーコー』、アルトー『神の裁きと訣別するため』他、多数の著訳書がある。

解説

〈本文解説〉

本文は、歴史とは何かについて、記憶、決定、自由をめぐって揺れ動く筆者の考察を記した文章である。全体は十の形式段落（1〜10とする）から成るが、四つの部分に分けて考えてみよう。

第一の部分（1〜3）

歴史とは何か、という問いに対して、筆者は中島敦の「文字禍」を引き合いに出し、歴史とはあったことをいうのか、それとも書かれたことをいうのか、という問いへと方向を限定していく。その問いについての中島敦自身の答えは宙づりのままで、不明である。

書かれなくても記憶されていることがあり、書かれても消滅していくものもある。筆者は自身の生とナポレオンの一生を例に挙げ、結局のところ「書かれなかった事は、無かった事じゃ」と断定することもできず、「書かれた事は、有った事じゃ」と言うこともできない、とする。

さしあたって歴史は、「書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったこと」の間にまたがって「画定することのできないあいまいな霧のような領域」を広げている、と筆者は考える。歴史学は、そのようなあいまいな巨大な領域に支えられて存在しており、この巨大な領域についてのわずかな情報を与えてきたものが、神話・詩・劇・伝承・物語・フィクションなのだ。

第二の部分（4〜6）

近年になって、歴史は「記憶」の問題として考えられる傾向が強くなってきた。歴史とは、単なる遺跡や史料の集積と解読ではなく、「個人と集団の記憶とその操作」のことであり、記憶する「主体性」や「主観性」と不可分に結びついている。つまり、「出来事を記憶する人間の欲望、感情、身体、経験」と切り離しては、存在し得ないのである。言い換えるなら、たとえ一つの出来事と見えることであっても、それを誰が記憶するか、その立場の違いによって、複数の歴史があり得る、ということである。

そのように歴史が記憶の問題と見なされるようになったのは、おそらく「歴史の過大な求心力から離脱しようとする別の歴史的思考の要請」であった、と筆者は考える。「歴史の過大な求心力」とは、次に出てくる、ある集団によって中心化された「代表的な価値観」の強制的な拘束力のことであろう。また「…から離脱しようとする別の歴史的思考」とは、たとえば、中心化された価値観から排除されたものから見た歴史のことである。そのようにして筆者は、歴史というものが「ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され、その国あるいは社会の成員の自己像（アイデンティティ）を構成するような役割をになってきた」と見なす。そして複数の立場からする「自己像をめぐる戦い」は、「言葉とイメージの闘争」でもあったのであり、歴史における「勝者」がある以前に、歴史自体が、他の無数の言葉とイメージの間における「相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージなのだ」と筆者は言う。ここで筆者が言っていることは、たとえば東アジア地域における戦争の記憶の複数性、あるいは世界史における西洋中心主義とオリエンタリズムの問題、あるいは小さな共同体における権力をめぐる闘争、等を思い浮かべてみるなら、具体的で明確な像となって理解できるのではないか。

さらに筆者は、歴史にかかわる記憶を、人間による普通の意味での記憶だけではなく、もっと広く、物質的、生命的な記憶へと拡大する。「情報技術における記憶装置（メモリー）」とは、たとえば、書物、写真、映画、コンピューター等のことであろう。これらは、人間の記憶を補強する役割を果たしてきた。次の「熱力学的な差異としての物質の記憶」という言葉はややわかりにくいが、これは前の「情報技術における記憶装置（メモリー）」を受けると同時に、さらに意味上の広がりを与えられているように思われる。「遺伝子という記憶」という生命的な視点と並立されていること、後で「人間の歴史をはるかに上回るひろがりと深さ」へと展開していくことから考えると、たとえば大地に残された記憶といった物質的な視点のことをも指しているのではないか。このようにして、人間の歴史は、それをはるかに上回る物質的、生命的な記憶の中における、局限され、一定の中心にむけて等質化された記憶の束にすぎないのである。言い換えれば、人間の歴史はそれをはるかに上回るひろがりと深さをもつ記憶によ

って支えられているのだ。

第三の部分（7）

　歴史という概念には、どこか「強迫的な性質」が含まれている。この「強迫」という語は、合理的な根拠がないにもかかわらず、そのことに囚われてしまうようなあり方のことを指す。ここでは、歴史がさまざまな形で個人の生を「決定」してきたように思われることを意味している。男として、あるいは女として、何々人として、あるいはこれこれという職業を受け継ぐ者として生まれてきた、等々といったことが、その当人の生を決定づけてしまうように見える。そのことを筆者は、歴史というものが「個人から集団を貫通する記憶の集積」として、現存する言語、制度、慣習……等々のすべてを形成し、破壊し、再生してきた成果の集積として、個人の生を決定づける、と言う。「私」の身体、思考、感情、欲望さえもが、歴史によって決定されている。人間であること、ある場所に生まれ、存在し、死んでいくことのことごとくが、歴史の限定を受けているように思われる。

第四の部分（8〜10）

　それでは、歴史によってすべてが決定される個人に、自由はないのか。一見すべてが決定されているようでも、それでも人間はその決定から自由になろうとする。死ぬことは歴史の決定であると同時に、歴史から解放されることでもある。いやその前にも、人間の自由な選択や行動や抵抗がなければ、そもそも歴史自体が存在し得なかっただろう。人間は歴史によって決定される一方で、歴史から自由であることもできるのだ、と筆者は考える。

　日々のささやかな行動であっても、人間はそれをするか、しないか、選択の自由をもっている。そのような様々な大小の自由は、歴史の強制力や決定力と矛盾することなく、歴史の中に含まれているのだ。歴史は、怜悧な選択であると同時に、気まぐれな偶然によっても、作られてきたのである。

　筆者は、歴史が偶然であるのか必然であるのかを問題にしているのではなく、歴史の決定力に対して人間の自由があり得るのかどうかを問おうとしているのである。さらに、そのように問うこと自体に意味があるのかどうかを考えようとしているのだ。かといって筆者は、歴史からの完全な自由を求めているのではなく、また歴史を無化したいと思っているわけでもない。歴史とは、「無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡」に他ならず、人間が生きるということは、それらとともにあることの「喜び」であり「苦しみ」であり「重さ」なのだ、と筆者は言うのである。

〈設問解説〉

　設問は、傍線部を手掛かりとして、本文の内容展開を問うものである。五つの傍線部が、本文の対比と段落に沿って設定されていることに注意したい。したがって傍線部を要素に区切って分析するといった近視眼的なやり方では、十分な答えに届くとは考えにくい。あくまでも本文の対比と段落展開に沿って、筆者の言おうとしていることを把握することが肝心である。

㈠　歴史学の存在を支えている領域にかかわる設問。第一の部分の理解が問われている。

　歴史とは何か、という問いを、筆者が「あったことをいうのか、それとも書かれたことをいうのか」という方向へと問い換えていることには、二つの常識的な見方いわば通念が前提とされている、と考えられよう。一つは、あったこと、つまり事実が歴史として書かれている、という素朴な通念であり、もう一つは、書かれることによって事実が成立しそれが歴史として形成される、という記述優先の考え方である。

　それら二つを前提にしているからこそ、筆者は2で書かれたことと書かれなかったことについて考察し、「『書かれなかった事は、無かった事じゃ』と断定すること」はできず、「『書かれた事は、有った事じゃ』ということもできない」と述べるのである。結局、筆者は先の二つの考え方を批判して、歴史は「書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったことの間にまたがっており、画定することのできないあいまいな霧のような領域を果てしなく広げている」（3）と考える。歴史についての学問である「歴史学」は、いずれにしても記述することで歴史を画定していくことになるのであるが、その存在が支えられているのは、この「巨大な領域」によってなのである。これが傍線部アの言っていることに当たる。

　このような筆者の見方は、第二の部分で複数の歴史があり得ること、歴史は次々と書き換えられていく潜在的な可能性を秘めていること、という内容へと展開していくための前提となるものである。

　とすれば、解答を記述するにあたっては、右の二つの通念的な考え方を批判的に捉えているというニュアンスを含めつつ、歴史学が事実や出来事を超えた膨大な領域によって支えられているということを明確に示さなければならないだろう。なお、3にある「ありえたこと、なかったこと」の理解がやや難しいが、これは次の4に出てくる「人間の欲望、感情、身体、経験」等と関連づけられたものと考えれば、納得できよう。また、神話、詩…等々は、歴史学の依拠する情報がわずかなものであったことを示すための具体例であるから、解答に記す必要はない。

　中心となる内容は、

・歴史学は、事実として記述されなかった膨大な事柄を含み込んで成立している

といったものになる。さらに副次的な内容として、

・（一般に）歴史という学問は、記述することによって歴史を画定する

ということも書いておくべきだろう。日本語としての順序は、副次的な内容を先に、中心的な内容を後にもってくるのが普通だから、右に挙げた順序を逆にして、間を逆接的なニュアンスでつなげればよい。

㈡　歴史の複数性および恣意性についての理解を問う設問。第二の部分における「自己像をめぐる戦い」の内容理解が問われている。

第二の部分で新たに出てくる言葉は「記憶」である。歴史の問題が「記憶」の問題として考えられるようになったのは、そう昔のことではない、という言い方で、ここに示されている考え方が、最近における民族対立、戦争責任、オリエンタリズム等をめぐる問題といった世界の状況を背景としたものであることが示唆されていよう。そして筆者の考え方の基本的な枠組みとなっているのは、歴史を「遺跡や史料の集積と解読」つまり事実の解釈とするような通念的な考え方と、「記憶の行為」と捉える考え方との対比であり、後者はさらに「個人とその集団の記憶とその操作」「記憶するという行為をみちびく主体性と主観性」へと言い換えられていく。その「記憶」が誰による記憶か、ということで、「主体性」「主観性」が問題とされていくのである。一つの事実と思われることであっても、誰がそれを記憶しているのかという立場の違いによって、記憶の内容は異なってくるのだ。ここに歴史が複数であり得ることの理由がある。

5では、それが、「歴史の過大な求心力」言い換えれば「ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化された歴史と、そこから「離脱しようとする別の歴史的思考」言い換えれば中心から排除された歴史との対比へと展開される。そのような複数の歴史の間における戦いは、同時に「その国あるいは社会の成員の自己像（アイデンティティ）」をめぐる戦いであり、「言葉とイメージの闘争の歴史」でもあるのだ。したがって、傍線部イの中の「他の無数の言葉とイメージ」とあるのは、歴史をめぐる言葉とイメージであって、歴史とたとえば文学とか芸術とかを対比しているのではは、もちろんない。

以上のことから、筆者は歴史というものを、複数形で考えていること、現在において歴史と見なされていることが将来において覆される潜在的な可能性を常に秘めていること、そのようにして歴史は無限に書き換えられていく終わりのない人間の営みであること、というふうに考えていることが読み取れよう。

傍線部イで問われていることの中心となっているのは、「相対的に勝ちをおさめてきた」ということの内容理解である。右のような流れに位置づけてここを考えるなら、これは、歴史がその社会において優勢な集団の価値観によって主観的に作られてきた、といった意味になろう。とすれば、記述すべき中心的な内容は、

・歴史は、その社会の優勢な集団の価値観によって主体的に選択されて作られた記憶である

といったものになるはずである。「事実」という捉え方を批判している以上、「記憶」という語は重要である。「言葉とイメージ」という語句もそれなりに重いが、これは「事実」を批判して〈観念〉であることを言っているものであり、「記憶」という語に内容上含み込まれる。また、「主体的」という語がややわかりにくいということであれば、「…集団の記憶とその操作」の「操作」のニュアンスを加味して、「恣意的に選択され」たとすれば、よりわかりやすい表現となるだろう。さらにその記憶の直接的な内容は、

・（歴史は）その社会の成員の自己像を構成してきた

というものである。右の二つの内容を二行枠に収まるようにまとめる。

㈢　歴史を越える記憶というものの内容についての理解を問う設問。第二の部分の後半部が問われている。

筆者の考える記憶は、普通に言う人間の記憶の範囲をはるかに越えている。「情報技術における記憶装置（メモリー）」は人間の活動範囲内でのことだから、まだわかりやすいが、「熱力学的な差異としての物質の記憶」（ここは、フィルムやコンピューターの熱力学的な作用を指すとともに、大地における地層のずれといったものまでをも含み込んでいるように思われる）「遺伝子という記憶」となると、常識的な意味での人間の記憶の範囲を越えて、大地に刻み込まれた記憶、多様な生命の中に刻み込まれた記憶、といったものをも含み込んでいると考えられる。「別の微粒子」「別の運動」（6）とは、人間を越えた自然や大地のありようを指しているのではないか。それに対して人間の歴史は、「局限され、一定の中心にむけて等質化された記憶の束」にすぎない、と筆者は言う。なぜ筆者がこのように考えるのかは、ややわかりにくいが、事実を記述したものとして歴史を絶対化して捉える見方を批判し、さらにそれを拡げて、人間中心的に歴史を捉えることを少しでも相対化したいとする意図にもとづくものと言えるのではないか。

設問は「なぜか」となっているから、筆者の考える記憶が人間の歴史を越える物質的、生命的な痕跡としての記憶までをも含みこんでいることが、その理由とならなければならない。解答として記述すべきことは、

・歴史は人間の記憶に局限されたものにすぎない

・記憶は（歴史を越える）物質的、生命的なものの痕跡をも含めて現実の中に残されている

という二つの内容になる。これを対比的にまとめればよい。

(四) 歴史のもつ強迫的な性質についての理解を問う設問。第三の部分が問われている。

第一と第二の部分を承けて、第三の部分は、歴史が個人の生を決定づけるという側面について述べられている。歴史は「個人から集団を貫通する記憶の集積」[7] として、個人の生を決定する。その集団あるいは社会のあり方のすべてにわたって、集積された記憶としての歴史が、個人の生までをも拘束するのだ。たとえるなら、日本人として、あるいは女として、あるいは貧しい家の子どもとして、あるいは伝統を受け継ぐ旧家の子として生まれた、等々といったことが、当人の生を決定づけてしまっているのではないか。それは当人にとっては、どうすることもできない、先験的なことのように見える。日本語で考えていること、米のゴハンを食べていること……等々といったことすら、無意識のうちに、自分の感性を形成し、かつ拘束しているのではないか。もし自分が日本人に生まれていなかったら、自分にはもっと別の人生が開けていたかもしれない……、等といったことである。以上の内容をまとめることが求められており、さらにこの問いは、次の(五)の中心的な内容である「自由」へと展開する前の段階に位置づけられたものであることを確認したい。

記述すべき内容は、

・歴史は先験的なものとされることで集団を位置づける

・歴史は個人の生を呪縛する

の二つである。「先験的」は、「個人の意思を超える」等の表現でも、もちろん構わない。「呪縛」についても、「決定づける」「強制する」「拘束する」「規制する」等、多くの表現が許容されよう。

(五) 歴史の決定力に対する個人の自由のありかを問い、他者とともにあることの意味についての理解を問う設問。設問文で「……と歴史についてのべているが」と出題者による確認がなされていることからもわかるように、当然のことだが、傍線部のみにこだわって考えるのではなく、「歴史」という本文全体のテーマに沿って考えなければならない。第一の部分から第三の部分までを視野に入れつつ、第四の部分が深く理解できたかどうかが問われている。

第四の部分は、歴史の決定力という第三の部分を「にもかかわらず」という逆接で承けて、個人の自由のありかを考察したものである。たしかに歴史が個人を決定するとしても、個人には今直面していることをするか、しないかという最小の自由がある。そして個人のもつ大小の自由は、歴史の強制力や決定力と何ら矛盾することなく、歴史の中に含まれている。そもそも歴史は、個人の「自由な選択や行動や抵抗」がなければ、存在し得なかったのである。

筆者は、歴史からの完全な自由を求めているのではなく、また歴史を無化しようと思っているわけでもない。歴史とは「無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡」であり、それらと「ともにある」ことの「喜び」「苦しみ」「重さ」だ、と言う。ここで「他者」という語は重要である。第一の部分で、「排除」されようとした「あいまいな霧のような領域」とあったのは、たとえば、この「無数の他者の行為、力、声、思考、夢想」のことではなかったか。排除されかけた他者の声に耳を傾け、他者とのかかわりの中で、新たに歴史を書き換えること、そこに自由があり、困難があり、責任がある。多数派の人間の主観的な記憶にもとづいて恣意的に作られたものが歴史であるのなら、歴史を書き換える可能性は無限に残されているのである。複数の国家、複数の集団、さらにその内にある無数の個人には、その数だけの歴史が潜在している。その社会で中心化された歴史だけを歴史とするのではなく、他者とともに歴史を新たに書き換えていくこと、そこに自由と困難と責任がある。傍線部オを通して筆者はそのようなことを述べている、と読み取ることができよう。

記述すべき最も中心的な内容は、

・人間は他者とのかかわりの中で新たな歴史を生み出す自由と困難と責任を負う（第四の部分）

である。「他者」「新たな歴史」「自由」「困難」「責任」という内容を的確に表現することが求められよう。次に書くべきことは、

・歴史は共同体の支配的な価値観を中心に作られ個人の生を決定する（第二の部分・第三の部分）

・歴史は個人の自由と抵抗なしには存在し得ない（第四の部分）

・歴史から排除された記憶を見直す（第一の部分・第四の部分）

である。解答としての内容を考えてしぼりこむときは、最も中心的なものを先にして、そこに付け加えるべきことを補っていく。それを文章として記述するときは、日本語としての普通の順序では、まず何についての文かという話題（主語）を提示し、副次的な内容を記述したあとで、最後のところに最も中心的な内容を記述する、というのが一般であろう。そのようにして右に挙げた内容を並べ替えるなら、解答はほぼ後に掲げたようなものになるはずである。

(六) 漢字の書き取り。単なる字体のことではなく、読解にかかわる語彙力が問われている。

a 「散逸」は、〈文書や書物などがばらばらになって失われ

ること〉で、「散佚」とも書く。b「超越」は、「超」も「越」も〈こえる〉意。「超」は〈飛びあがって上へこえる、度をこえる〉ニュアンスが強く、「越」は〈境をこえて遠くへこす〉ニュアンスが強い。c「機会」。簡単すぎてかえって戸惑うが、まさか「機械」「奇怪」と誤ることはあるまい。d「信仰」。「神」とあるから語彙上の紛れはないが、「仰」の字体に注意。e「矛盾」。現代文では使用頻度の高い語である。

以上、設問が本文の内容の展開に沿ってなされていることが理解できたことと思う。それぞれの設問を考えた後で、次に掲げた解答を通読してみてほしい。ほぼ本文の要約と重なる形になっているということがわかるのではないか。そのことを確認することで、大学の出題者が受験生にどのような力を求めているのかが、理解できることと思う。

解答

(一) 歴史学は、記述することによって歴史を画定しながら、同時に事実として記述されなかった膨大な領域を前提に成立するということ。

(二) 歴史は、その社会において優勢な価値観によって恣意的に選択され、社会の成員の自己像を構成してきた記憶だということ。

(三) 人間の記憶にもとづく歴史は局限されたもので、現実の中にはそれを越える物質的、生命的な痕跡としての記憶が残存するから。

(四) 歴史は、集団を位置づけている先験的なものとみなされることによって、個人の生を呪縛する構造を持つということ。

(五) 歴史とは、共同体の支配的な価値観を中心に作られ個人の生を決定する一方で、個人の自由と抵抗なしには存在し得なかったものであり、人間は歴史から排除された記憶を見直し他者とのかかわりの中で新たな歴史を生み出す自由と困難と責任を負う、ということ。（一一九字）

(六) a＝散逸（佚）　b＝超越　c＝機会　d＝信仰　e＝矛盾

出典 宇野邦一『反歴史論』〈第3章 歴史のカタストロフ 1 歴史を引き裂く時間〉（せりか書房）

解答

㈠ 歴史学は過去の記憶や記録だけでなく、記憶や記録がなされていない事柄までを含む膨大な領域を対象として成立しているということ。

㈡ 歴史は国や社会の代表的な価値観によって恣意的に選択・構成され、その成員の自己像を作り上げてきた記憶であるということ。

㈢ 歴史は局限された人間の記憶にすぎないが、記憶自体は情報や物質や生命などにまで及ぶ概念であるから。

㈣ 歴史は集団の記憶の集積として個人に直結し、個人の意識から身体に至るまで強制的に決定づけるということ。

㈤ 歴史は個人と集団の記憶の中心化・集積として個人を決定すると同時に、その決定に抵抗して自由を求めた無数の他者の行為や声や思考などの痕跡にほかならず、そのような他者とつながることで喜びや苦しみを共有し、歴史を背負う重圧を実感するということ。（百十八字）

㈥ a―散逸（佚） b―超越 c―機会 d―信仰 e―矛盾

▲解 説▼

要旨 歴史は書かれたことと書かれなかったこと、あったこととなかったことの間にまたがるあいまいで巨大な領域に支えられている。歴史とは遺跡や史料の集積と解読ではなく、それらを含めた個人と集団の記憶とその操作であり、膨大な記憶の広がりの中で局限され、一定の中心に向けて等質化された記憶の束にすぎないのである。しかしそれゆえに、歴史はさまざまな形で個人の生を決定してきた。私の身体、思考、感情、欲望さえもが歴史によって決定されている。にもかかわらず、私はそのような決定から自由であることもできる。歴史の強制力や決定力と矛盾することなく、歴史の中には自由が含まれている。歴史とはそうした怜悧な選択と盲目の選択や偶然によって作られてきた無数の他者の行為や思考などの痕跡にほかならず、またそれらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである。

着眼 本文は中島敦の「文字禍」を手がかりに歴史とは何かという問いをめぐる主張を展開したもので、歴史そのものを問い直そうとする反歴史主義の流れに沿った内容となっている。全体は十段落から成る。これを三つの部分に分けて、論旨の展開をたどろう。

◇第Ⅰ部 中島敦の問い――歴史とは？（第一～第三段落）

歴史とは、あったことをいうのか、書かれたことをいうのか

↓

歴史＝あいまいで巨大な領域に支えられ、養われている

◇第Ⅱ部 歴史と記憶の問題（第四～第六段落）

歴史＝遺跡や史料の集積と解読を含めた記憶の行為

↓

個人と集団の記憶とその操作

＝

記憶の中心化による集団のアイデンティティの構成をめぐる闘争の歴史

◇第Ⅲ部 歴史による決定と自由の問題（第七～第十段落）

歴史＝個人の生を決定する一方で、個人の自由も含む

←
歴史＝無数の他者の痕跡
←
喜び・苦しみ・重さ（＝歴史）の共有と実感

▼(一) 第Ⅰ部では中島敦の「文字禍」を手がかりに、歴史への問いが提示される。歴史とは書き留められた過去の出来事という常識的な見方が否定され、書かれなかった事柄や今後書かれうる事柄も歴史の対象たりうることが指摘される。これをふまえて傍線部アが導かれる。

まず、「歴史学」とは文字どおり歴史を対象とする学問であるが、筆者のように歴史そのものの意味や可能性、歴史認識のあり方などを問題とするわけではなく、そのような問題をひとまず保留して、個々の具体的な歴史的事象を研究対象とする学問である（「日本史」や「西洋史」などはこれにあたる）。したがって、歴史学の存在それ自体が問題視されていることを理解しよう。

次に、「この巨大な領域」とは直前の「そのようなあいまいな領域」を指しており、これは前文で「歴史は、書かれたこと……あいまいな霧のような領域を果てしなく広げている」と具体的に示されている。問題はこれをどうまとめるかであるが、次の第Ⅱ部で歴史と記憶のかかわりが扱われることから考えて、「書かれたこと、書かれなかったこと」に特化して、「記憶や記録がなされた事柄となされなかった事柄を含む領域」などと要約すればよいだろう。

さらに「支えられ、養われている」については、この領域が歴史学の成立の前提であることを述べればよい。なお傍線部ア直後の文で、この記憶や記録が神話や詩や劇などの形で行われてきたことが指摘されているが、これは字数的に見て省略してもかまわないだろう。以上より、解答のポイントは次の二点となる。

① 記憶や記録がなされた事柄となされなかった事柄を含む膨大な領域
② この領域を前提とした成立

▼(二) 第Ⅱ部では「記憶」をキーワードにして歴史の意味がより深く検討される。まず第四・第五段落では記憶の操作による歴史の中心化、言い換えれば歴史の政治性が説明される。

第四段落の「歴史とは個人と集団の記憶とその操作……主体性と主観性なしにはありえない」に着眼しよう。これはよく言われるように、歴史とは過去の出来事が客観的に記述されたものではなく、作為であれ無作為であれ、価値観やイデオロギーや立場などさまざまな要素を含む特定の視点から、過去の出来事が恣意的に選択・構成されたものであることを指摘したものである。次の第五段落に「歴史は、ある国、ある社会の……自己像（アイデンティティ）を構成するような役割をになってきた」とあるのも、趣旨は同じである。つまり、歴史とは「自己像をめぐる戦い、言葉とイメージの闘争の歴史でもあった」のである。

以上をふまえて傍線部イを検討しよう。「相対的」は〝物事を他との関係・比較においてとらえるさま〟。ここでは、「歴史」となる以前の特定の言葉やイメージが「他の無数の言葉とイメージ」との力関係において勝利したものであることが述べられている。そしてこの「言葉」や「イメージ」とは、その後に歴史となるものもならないものも含めた膨大な記憶であり、それが国や社会の代表的な価値観によって歴史として中心化され、その成員の自己像を構成する役割をになうのである。以上より、解答のポイントは次の二点となる。

① 国や社会の代表的な価値観によって選択・構成された記憶
② 国や社会の成員の自己像をめぐる戦いに勝利してきた記憶

▼(三) 第六段落は、歴史を記憶の一種とする考え方が、さまざまな現象を「記憶」としてとらえる他の学問分野の影響によっている可能性を指摘している。その例として「情報技術における記憶装置（メモリー）」「熱力学的な差異としての物質の記憶」「遺伝子という記憶」が挙げられている。このような物質や生命のレベルにおける記憶形態の延長上に人間の歴史をとらえることで、その特殊性が際立つと筆者は考えている。

傍線部ウ前文の「歴史は局限され、一定の中心にむけて等質化された記憶の束にすぎない」に着眼しよう。これは第五段落の「歴史は、ある国、ある社会の……自己像（アイデンティティ）を構成するような役割をになってきた」を言い換えたものであるが、「人間の歴史をはるかに上回るひろがりと深さをもっている」記憶との対比において、歴史が「局限され」たものであることが強調されている。すなわち、記憶は人間を越えて物質や生命全体へと「ひろがり」、時間的にも人間の歴史を越えた「深さ」をもつ概念だというのである。以上より解答のポイントは次の二点となるが、〔解答〕に示したように記憶と歴史を対比的に説明するのが書きやすいだろう。言うまでもなく、理由説明であるから、文末は「～から」「～ので」とすること。

① 歴史＝局限された人間の記憶
② 記憶＝情報技術のメモリー・物質・遺伝子などにまで及ぶ概念

▼㈣ 前に見たように、第七段落以下の第Ⅲ部では歴史における決定と自由が論じられる。傍線部エのある第七段落は歴史による決定をテーマとするが、これはもちろん第Ⅱ部で論じられた、歴史の求心力、すなわち国や社会の成員のアイデンティティ形成における歴史の圧倒的な関与の問題と深くかかわっている。これをふまえて傍線部エ以下を検討しよう。「強迫的」は、「強迫観念（＝いくら否定しようとしても頭から離れない不快な考え）」という言葉があるように〝相手に無理強いするさま〟の意で、ここでは歴史が個人の生や存在を否応なしに決定するという文脈で用いられている。その具体的説明が傍線部エ以下である。「個人から集団を貫通する記憶の集積として」「歴史は、さまざまな形で個人の生を決定してきた」「私の身体、思考、私の感情、欲望さえも、歴史に決定されている」（第七段落）、「歴史の強制力や決定力」（第九段落）などとあるように、歴史は国や社会と個人の記憶を直結させ、意識から身体のレベルに至るまで個人を規制し決定することが指摘されている。以上より解答のポイントは次の二点となる。

① 歴史＝個人から集団を貫通する記憶の集積
② 歴史＝個人の意識から身体に至るまで強制的に決定づける

このうち①のポイントは、できれば「集団と個人の記憶を直結させる」「集団の記憶を個人に植えつける」などと具体的に説明するのが望ましい。また②のポイントは、「強迫的」の意味を生かし、「強制する」「呪縛する」などの言葉を用いて説明するとよい。

▼㈤ 第Ⅲ部の内容をまとめる設問である。歴史の決定力・強制力を論じた第七段落に対して、第八・第九段落ではそれに抵抗する人間の自由が論じられ、この両者が歴史を作っていくと述べられる。すなわち、一方には「怜悧な（＝賢い）選択」による「歴史の強制力や決定力」があり、他方には「気まぐれな、盲目の選択や偶然」による「自由の集積や混沌」があって、この両者が拮抗しながら歴史が形作られていくというのである。以上の内容をふまえて第十段落では、個人は歴史から全くの自由ではありえず、歴史を無視できないことが述べられ、傍線部オに至る。

まず、「それら」は前文の「無数の他者の行為……夢想の痕跡」を指している。「ともにある」とは、歴史を作ってきた人々とつながり、自分もまた歴史を作っていくことをいう。それが「喜び」なのであり、同時に歴史の決定と自由のはざまにあることの「苦しみ」なのである。「重さ」とはそのような歴史の集積を背負う重圧や責任の重みをいう。以上より解答のポイントは次の三点となる。

① 歴史の決定力・強制力と個人の自由の相剋
② 歴史＝無数の他者の行為や思考などの痕跡
③ 歴史につながることの喜び・苦しみ・重み

このうち①のポイントについては、歴史の決定力・強制力を生み出す記憶の中心化（第Ⅱ部の内容）にも触れるとよいだろう。②のポイントは一見不要にも見えるが、本問が内容説明問題である以上、指示語「それら」の内容を明示する必要がある。③のポイントについては、喜び・苦しみ・重みが生じるゆえんを、過去に生きた人々とのつながりや歴史への参与として説明すればよいだろう。

半解例を二つ挙げておこう。

歴史からの完全な自由を欲したり、歴史をまったく無視したりするのではなく、歴史に痕跡を残した無数の他者の行為、力、声、思考、夢想とともにあることで、彼らと喜びや苦しみを共にし、歴史の重さを実感するべきだということ。

これはほぼ最終段落の内容のみでまとめた解答である。歴史の強制力と自由の問題に触れていないので、評価は低いだろう。

歴史とは、歴史の決定力・強制力に抵抗して自由であろうとして敗れた無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡にほかならない。彼らの喜びや苦しみを感じたり、歴史の重圧を感じたりしながら、書かれなかった歴史にも思いを馳せるべきであるということ。

これは歴史に記されることなく埋もれてしまった人々に光を当てることの必要性を訴えた内容となっているが、傍線部オの趣旨からはずれた内容であるため、これも評価は高くないだろう。

▼(六) a、「散逸（佚）」は〝まとまっていた書物・文献などが散り失せること〟。

語句 ○『文字禍』＝一九四二年、文芸雑誌『文学界』に『山月記』とともに発表された短編小説。アッシリアの老博士が文字に存在する霊の正体をつきとめようとして、逆に文字の霊に祟られ、数百枚の重い粘土板の下で圧死するという話。

参考 宇野邦一（一九四八年〜）は評論家。島根県松江市生まれ。京都大学文学部卒業後、パリ第八大学で学ぶ。神戸市外国語大学助教授を経て、二〇〇八年現在、立教大学教授。現代フランス文学専攻。著書に『意味の果てへの旅』『詩と権力のあいだ』『ドゥルーズ　流動の哲学』などがある。『反歴史論』は二〇〇三年発刊。

講評

一　現代文（評論）：フランス文学を専攻する宇野邦一の文章で、歴史とは何かという根本的な問題を論じたもの。内容的に難しくはないが、二十世紀の反歴史主義の流れ（レヴィ＝ストロース、ミシェル＝フーコー、ハンナ＝アーレントなどが提起した一連の歴史批判）をある程度知っていると、理解もスムーズになると思われる。設問構成、解答欄ともに例年どおり。(一)〜(四)が部分読解問題、(五)が要約問題、(六)が書き取りである。(一)は標準レベルだが、まとめるのに苦労する。(二)は傍線部の趣旨を読み取りにくく、やや難のレベル。(三)は比較的まとめやすい標準問題。(四)は「強迫的」をどう説明するかがカギとなり、標準〜やや難のレベル。(五)は例年どおり高い要約力が求められており、やや難のレベル。(六)の書き取りはやや易で、一つも落とせない。

二　古文（説話）：『古本説話集』は頻出出典の一つで、本学でも過去に出題歴がある。典型的な霊験譚で、受験生にもおなじみのテーマであろう。現代文よりずっと易しい印象を受けたものと思われる。設問は従来どおり、口語訳と説明問題の組み合わせである。総じて標準レベル。(一)の口語訳では、(三)と異なり指示内容の具体化までは求められていないので、指示語の内容は明示しなくてよいだろう。(四)・(五)の説明問題も解答のポイントははっきりしている。

三　漢文（随筆）：兪樾は清の有名な学者であるが、入試での出題はまれ。本題の『右台仙館筆記』も出題歴はないと思われる。本文は標準的なもので、内容的にも面白い。ただし、文意のとりにくい箇所がいくつかある。設問は総じて標準レベル。(二)の理由説明は何をポイントにどこまで書くか迷うところ。(五)は読解力を試す良問である。

四　現代文（評論）：演出家竹内敏晴の文章。例年の四と比べればわかりやすい内容といえる。設問は、例年どおり内容把握の説明問題が四問で、設問は総じてやや難のレベル。うまく説明するのがなかなか難しい。それでも(一)・(三)は比較的書きやすいだろう。(二)は解答の方向性が定めにくい。(四)は傍線部周辺の語句を機械的につなぐだけなら易しいが、筆者の真意を把握してまとめようとすると骨が折れる。このあたりが文科らしい問題である。

全体として、現代文と漢文は例年並み、古文はやや易化したといえよう。

国語(現代文)　　東京大学　(前期・文科)　1/4

＜総括＞

文科　出題数	現代文２題･古文１題･漢文１題	試験時間１５０分
理科　出題数	現代文１題･古文１題･漢文１題	試験時間１００分

読解のために必要な情報の少ない文章であり、受験生にとっては難しい文章だっただろう。

＜本文分析＞

大問番号	第一問（文・理共通）
出　典（作者）	宇野邦一『反歴史論』
頻出度合・的中等	ときどき出題される筆者である。
分　量　前年比較	分量（減少・変化なし・増加）［減少を囲む］ 約２５００字　昨年より８００字減
難　易　前年比較	難易（易化・変化なし・難化）［難化を囲む］

＜大問分析＞

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）
第一問	評論（哲学的思想）	(一)	記述	標準	傍線部直前の内容を踏まえ、「歴史」と「歴史学」の関係を考えながら解答を作ること。
		(二)	記述	難	傍線部を含む文脈が把握しづらく、「相対的」のニュアンスを出すのが難しい。
		(三)	記述	やや難	「ひろがり」だけでなく「深さ」の意に留意して解答を作ること。
		(四)	記述	やや難	「歴史という概念そのもの」という言い回しの意味するところを考えること。
		(五)	記述	難	直前に「歴史とは、無数の他者の～痕跡にほかならない」とあるが、それは「歴史」の「中心化」「等質化」から漏れたものの痕跡を指す。
		(六)	記述	標準	特に難しいものはない。

※難易度は５段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

＜学習対策＞

様々なジャンルの評論を読み、そのテーマに対する理解を深めるとともに、文章の論理構造をしっかり把握できるようにしたい。
設問ごとの解答内容に重複もありうることを踏まえ、的確に書くべき要素を捉え、簡潔明快にまとめる練習をしておこう。

河合塾　解答速報

第一問

(一) 歴史学は、事実かどうか学問的に確定できない出来事が無限に増殖する領域に依拠して、初めて学問として可能になるということ。

(二) 歴史とは、様々な記憶のせめぎあいのなかで、たまたまその社会の代表的な価値観などに応じて生き残った言説や表象の一つにすぎないということ。

(三) 人間社会に即して中心化され等質化された歴史と比べて、記憶は物体や生体の至るところに刻み込まれた多様な情報までをも含むから。

(四) 歴史が個人の記憶を集団の記憶へと統合し集積するものである以上、そのなかで生きる個人のありようの一切を規定することになるということ。

(五) 歴史は人々の記憶を統合するものであるがゆえに、かえってそこからこぼれ出た様々な異質性を痕跡として見出すこともできる。それを見つめ、個人が歴史から自由でありえたことと、歴史が個人を抑圧することを歴史の両面として引き受けるべきだということ。

(六)
a 散逸（佚）
b 超越
c 機会
d 信仰
e 矛盾

代ゼミ　解答速報

第一問

（一）歴史学は、史料の有無や事実か事実でないかという境界を超えた広範な領域における神話や物語、伝承等に基づいて成立しているということ。

（二）歴史は社会の代表的な価値観によって成員の自己像を確立する働きをするため、他の言葉やイメージよりも重要なものとみなされてきたということ。

（三）歴史が人間と集団の記憶にとどまるのに対して、記憶そのものは情報媒体や諸物質、生命体の本質である遺伝子にまで及ぶ広範な概念だから。

（四）歴史は様々な社会装置を通して個人のあり方を決定しており、人間の身体や感情、生死に至るまで生き方を強制する側面をもっているということ。

（五）歴史とは個人と集団の記憶の総体を意味し、そこには他者の行為や思考とつながることによって歴史に参与する喜びや、歴史のもたらす強制力や決定力に支配される苦しみ、および記憶の集積としての重みを感じることなど、さまざまな主観性が伴うということ。

（六）

a	散逸
b	超越
c	機会
d	信仰
e	矛盾

（七）

採点欄

【出題分析】

出題・解答形式	文科＝全４問（現代文２・古文１・漢文１） 理科＝全３問（現代文１・古文１・漢文１）
分量（対試験時間）	妥当
難易度（昨年比較）	同程度
その他特記事項	

【設問別講評】

問	出題分野・テーマ	設問分析（内容・解答のポイントなど）	難易
一	現代文（評論） 宇野邦一『反歴史論』	○記憶として捉えた歴史と、個人との関係について論じた文章。論旨は明快だが、答えのまとめ方が難しい。	標準
二	（文科）古文 『古本説話集』 （理科）古文（文科に同じ）	○文章の難度・設問の数・記述の分量ともほぼ昨年並み。昨年に続き「説話」からの出題となった。同作品は平成十五年にも出題。 ○理科の方は文科よりも２問（現代語訳・内容説明問題）少なく、他は文科と同じ。	標準 標準
三	（文科）漢文（文章） 『右台仙館筆記』 （理科）漢文（文科に同じ）	○分かりやすい文章で読解で困ることはないが、過不足なく解答をコンパクトにまとめるのには苦労するだろう。 ○理科の方は文科よりも１問（理由説明）少なく、他は文科と同じ。	標準 標準
四	現代文（評論） 竹内敏晴『思想する「からだ」』	○役者の感情表現をめぐる考察。説明すべき傍線部に口語的な言いまわしが多い。内容を汲み取って適切に表現する力が問われる。	標準

【合格アドバイス】

現代文＝主題、構成を的確に読みとる読解訓練と、限られたスペースに過不足なくポイントを盛り込む記述解作成の訓練を積みたい。120字程度の要約練習も忘れずに。
古 文＝確実な基礎知識を身につけるのはもちろんだが、簡潔に解答をまとめ上げる上で現代語の幅広い語彙力も欠かせない。過去問でしっかり実戦練習しておくこと。
漢 文＝読解力のほかに、簡潔に解答をまとめられる文章力と語彙力を高めて欲しい。

第一問

（一）
出来事と記述とに画定されず、実在性さえ超越して曖昧に広がる広大な領域の情報を、神話や詩等を通じて得ることで、学問としての歴史学が存在し発展してきたこと。

（二）
歴史は、ある社会の代表的価値観に支持されて、その社会の成員の自己像を構成する際の言葉とイメージをめぐる闘争を制し、社会的に通用しているものであるということ。

（三）
物質的なレベルにまで広がり、量的にも莫大な記憶に対し、歴史は個人と集団が人間存在の制約下で、主体的、主観的に記憶しようとし、操作した範囲に局限されるから。

（四）
歴史は個人から集団を貫通する記憶の集積として、現存する人の営為の前提に対する、さらにその成果の集積として個人の生そのものに対しての決定力、強制力を持つこと。

（五）
歴史は、記憶の行為として出来事を記憶しようとした個人や集団の主体性や主観性を、また、決定力を有する存在たる自身に抗しながら同時に自身を構成している個人の自由を、我々に教えることで、生における苦楽と歴史を作る個人の責任の重みを痛感させること。
（120字）

（六） a＝画定（劃）　b＝超越　c＝機会　d＝信仰　e＝矛盾

【解説】
2000年に出題形式の大きく変更され、それ以後は全く同じ形式が踏襲されてきたが、今年も同様である。ただ、内容的にみると、まず素材が2006年の北大で出題された箇所と全く同じであり、これは従来の東大の出題にはなかったことである。また、内容的にも、特に2005～2007年の3年間の問題が精緻に作られている点を考えると、それには及ばない感を受ける。（一）から順に、文章の展開に沿って解いていって、（六）の要約性を備えた問題で完結する点は同様であるものの、やや疑問の残る出題と言えるかもしれない。

（一）
傍線部中に指示語がある東大の典型パターンと言える。その指示内容を明らかにしながら、傍線部を分解し、全要素の完全な言い換えを図るようにしたい。
傍線部は「歴史学の存在そのものが／この巨大な領域に／支えられ／養われている」と分解できる。『歴史学』そのものの言い換えを図るべきか悩むところであるが、これは文中に置換可能な表現もなく、全体の字数を考えても、このまま用いて構わないであろう。問題は「この領域」の指示内容である。直前の「歴史は、書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったことのあいだにまたがっており、画定することのできない曖昧な霧のような領域～」とありこれを受けていることは間違いない。ただ、これをそのまま書くわけにはいかず、ここで表現力が要求される。
そもそもこの文章は、第一段落において、「歴史とはあったことをいうのか、それとも書かれたことをいうのか」という「問い」から始まっている。この二つの要素だけなら、解答に納めやすいのだが、傍線部の直前では、先に押さえたように、内容が広がってしまっている。ただ、この二つが出発点になっているのだからこれを中心としながら、先の全体を押さえるような配慮が必要である。（「ありえたこと、なかったこと」までが『歴史学』を「支え」るというのは

違和感があるかもしれないが、たとえば一つの政策を政府が採用する際に、そこで検討された別の案は、実際に採用されたそれに影響を与えているのであり，それらの全体が「歴史」を構成している、と考えることは十分可能である。）先の、「歴史は，書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったことのあいだにまたがっており、画定することのできない曖昧な霧のような領域」という表現を簡約化する際に、いま述べたような冒頭からの論理展開、さらには実質的な内容を分かってしているかどうかは採点者は見逃がせるもので、誤魔化しはきかない。文中の「画定」、「あいまい」という語句をうまく利用しながら、いかにまとめるかで相当差がついたところであろう。模範解答は、「出来事と記述とに画定されず，実在性さえ超越して曖昧に広がる広大な領域」と処理したが，参考にしてほしい。

次に、こういう「領域」が「歴史学」を「支え」、「養」うという内容についての説明だが、これは傍線部の直後を用いればよい。直後は「この領域」と巧妙に傍線部の表現を受け、「情報を与え」たものとして、「神話」、「詩」、「劇」などが列挙されている。実際これらは「歴史学」の研究の対象であり、「支え」るというにふさわしいものである。これらを簡約して解答に用い、後は「養われている」という表現にまで配慮して解答が完成する。

（二）

第四段落以降の論理展開をしっかり押さえておかないと、大きく失点する危険性のある問題である。第四段落においては、「歴史の問題が『記憶』の問題として思考される」ようになったという内容が述べられている。それを受けた第五段落においては、「歴史を記憶の一形態と見なそうとしたのは、おそらく歴史の過大な求心力から離脱しようとする別の歴史的思考の要請」とある。つまり、「歴史」には「過大な求心力」があり、その対立項として、「歴史を記憶の一形態と見なそうとした」のである。ここには明確な対比があり，この（二）の傍線部は、この前者の説明が要求されているのである。内容だけ見ると、ただ直前を押さえるだけで解答できる問題のように見えるが、今押さえた対比の把握が甘いと、大きく外す危険性がある。

直前をもう一度見直すと、「歴史」の「過大な求心力」→「歴史は、ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され、その国あるいは社会の成員の自己像（アイデンティティ）を構成する役割を担ってきた」→「歴史とは、そのような自己像をめぐる闘い、言葉とイメージの闘争の歴史でもあった」→[傍線部]、という流れである。直前の一文と傍線部との連続性を把握することがまず大切である。つまり、「歴史とは、そのような自己像をめぐる闘い、言葉とイメージの闘争の歴史でもあった」のであり、その「闘争」における「相対的」な勝者だと、傍線部では述べているのである。

となると次に必要な作業は，「そのような自己像」の指示内容の把握のために、もう一文さかのぼることになる。そうやって直前の内容を総合的にみると、「国あるいは社会の自己像（アイデンティティ）を構成」するにあたって、それは「ある国，ある社会の代表的な価値観によって中心化され」た「歴史」が大きな「役割」を果たすのである。（たとえば，北朝鮮の「歴史」が金王朝を賛美する形で描かれ、そういう金一族の働きによって恩恵を受ける国民という構図＝「自己像」が作られていることは想像に難くないであろう。）「国あるいは社会の成員の自己像（アイデンティティ）」という表現の具体的な内容が分かりにくいというのであれば、以下の例で理解可能であろう。つまり，かつての日本人が「勤勉」と呼ばれたり、あるいは同じ時期に「エコノミックアニマル」と呼ばれたりしたのは、どういう視点から日本人を見るかの違いであって、高度成長を推進し、勤勉を鼓舞するような「価値観」が「中心」にあれば、そう呼ぶことになるし、その勤勉さを国際貿易のバランスを崩すという点を「中心」に捉えれば，後者のような呼称になるのである。こうい

う内容が理解できれば、解答の方向性は決定する。『代表的な価値観によって中心化』→「国あるいは社会の成員の自己像（アイデンティティ）を構成』→「そのような自己像をめぐる戦い、言葉とイメージの闘争の歴史」という直前の流れをそのまま押さえれば実はよかったのである。説明が要求されているのは「言葉とイメージの闘争』における「相対的」な勝者であり、その「闘争」がいかなるものであるかを説明するために、『代表的な価値観によって中心化』、『国あるいは社会の成員の自己像』、といったワードを確実に押さえていくことが必要だったのである。

分かりやすくするために、模範解答は表現を工夫してあるが、制限の厳しい受験生の場合には、そのまま用いたことで大きな減点はないと思われる。対比をしっかり把握して（だからこの問題で「記憶』というワードを用いた時点で点はないと思った方がいい。）、直前の内容を、キーワードを的確に押さえながらいかに整理するかで決する問題である。模範解答をよく確認してほしい。

（三）

これも対比の把握が絡み、直前が解答の中心になる問題ではあるが、かなり慎重な作業が要求される難問である。この傍線部は段落の最後に位置しており、段落全体のまとめになっている。（そういう構造の点からいえば、二と全く同じと言える。）したがって、段落の最初からの内容を注意深く押さえていくことが必要である。「情報技術における記憶装置（メモリー）の役割さえも、歴史を記憶としてとらえるために一役買ったかもしれない」とあり、この内容は、第四段落に追加するといってもよい内容である。したがって、『代表的な価値観によって中心化され」た「歴史」との対比が述べられた直前の第五段落よりもむしろ、第四段落との関係の方が強いのである。第六段落に話を戻せば、冒頭の一文以後、「物質の記憶」、「遺伝子という記憶」などの具体例が列挙され、それが『量的に歴史をはるかに上回る記憶のひろがり」と総括されている。一方『歴史は局限され、一定の中心に向かって等質化された記憶の束にすぎない」、『歴史は人間だけのもの」と述べられて傍線部に至り、傍線部で「記憶の方は、人間の歴史をはるかに上回るひろがりと深さ」という対比の明確な内容が述べられる、という流れである。

以上のように、「物質」にまで『ひろが』る『記憶』⇔「局限され、一定の中心に向かって等質化された記憶の束にすぎ」ず、『人間だけのもの」である「歴史」という対比が明確なのであるから、当然前者の方が、「ひろがりと深さ』の点で「上回る」という因果関係の構築は一見容易なように見える。実際、この対比を明示すれば、解答の枠組みはしっかり出来上がる。さらに、前者の説明については今押さえた内容で十分であろう。問題は、後者の処理である。「局限され、一定の中心に向かって等質化された記憶の束にすぎ』ず、「人間だけのもの」である「歴史』という、意味明瞭とは言い難い内容をそのまま用いてもよいのであろうか？

実際の受験生であれば、この難問に深入りせず、今押さえた対比を軸に、とりあえずそのまま用いて１～３点を狙うという戦略はそれなりに有効である。しかし、出題者の意図はもう少し先にある。「記憶」としての「歴史」については、第四段落で述べられている。そこで、「歴史』＝「個人の歴史と集団の記憶とその操作であり、記憶するという行為をみちびく主体性と主観性なしにはありえない」＝「出来事を記憶する人間の欲望、感情、身体、経験を超越してはありえない」、と述べられている。この内容こそが、「局限され、一定の中心に向かって等質化された記憶の束」と対応するものなのである。また、この『束」という表現こそが『集団の記憶」と対応するものであり、「局限され、一定の中心に向かって等質化され」るのは「操作』されるからである。よって、より高得点を目指すためには、先の対比のなかに、こういう第四段落の内容を組み込むことが必要だったのである。繰り返しになるが、実際にはここまで深入りせず、直前の内容を踏まえて、対比構造だけは明示する形で失点を最少に防ぐことも一つの選択であったであろう。

(四)

難問の後には一転して易しい問題が来るということは東大では珍しくない。この傍線部は段落の冒頭に位置し、直後でその内容を具体的に述べるという構造になっているのであるから、直後をまとめればある程度の得点は可能である。しかし、易しいとは言ってもやはり東大である。この問題においては論理関係の処理を誤ると、せっかくのサービス問題でかえって失点することになりかねない。直後の内容を順に追っていこう。

「歴史」＝「個人の生を決定」→「個人から集団を貫通する記憶の集積として、今現存する言語、制度、慣習、法、技術、経済、建築、設備、道具などを形成し、保存し、破壊し、改造し、再生し」→「新たに作り出しさた数えきれない成果、そのような成果全ての集積として、歴史は私を決定する」、という内容である。さらに第九段落においては「歴史の強制力や決定力」という表現もあり、これも傍線部の「歴史」の「強迫的な性質」と同内容である。こうやって直後を見ていけば十分解答は可能であるが、その直後を無造作に詰め込むと意外と低い評価しか得られないので注意したい。先に押さえた内容をしっかり整理する必要がある。

まず「歴史」には、「個人から集団を貫通する記憶の集積として、今現存する言語、制度、慣習、法、技術、経済、建築、設備、道具などを形成し、保存し、破壊し、改造し、再生」するという力があり、これも「強制力」の内実の一つである。「言語、制度、慣習、法、技術、経済、建築、設備、道具」といった具体例をそのまま書くわけにはいかないから、これはある程度まとめる必要がある。

次に、それらの「成果すべての集積として、歴史は私を決定する」のである。つまり「歴史」の「強迫的性質」＝「強制力」は二段階なのである。制度を作ってしまうということと、その「成果」としての制度のなかでの個人の生を「決定」することとをきちんと整理して書かないと、評価されないのである。逆に言えば、そういう論理構造さえ気をつけてまとめれば十分高得点も可能だったのであり、こういうところをしっかり得点できるような訓練を積んで欲しい。

(五)

最後はいつも通りの一二〇字問題である。あくまでも傍線部の問題として、近辺から根拠をしっかり押さえながら、本文全体との関わりをどこまで把握すればベストの解答に仕上がるのか、一問でも多く訓練する必要がある。

さて、この問題においても、まずは傍線部自体の分析が大切である。傍線部は「それらとともにあることの／喜びであり／苦しみであり／重さなのである」という内容である。以上のように分解でき、さらに分析すれば、主語がない。よってこれを補充して考える必要があり、その内容は、「歴史とは」である。こういう作業を一つ一つ確実に行った上で、「それら」の指示内容を押さえると、「無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡」である。こういう具体内容をそのまま書くわけにはいかないから、それらが文中においてもつ意味を考えること、つまり、内容的に対応する箇所を探していくことが必要である。直前の第八～九段落の内容を確認すると、そこで述べられているのは、(四)で押さえた「歴史の強制力や決定力」と個人の「自由」との関係である。「歴史」は確かに「強制力」を持つものの、個人はそれから「自由になろうとする」のであり、「抵抗」も行い、結局「歴史」には「自由」が「矛盾することなく含まれている」のである。さらに、それらが「歴史を作ってきた」とも述べられているのである。こういう「歴史の強制力」に抗し、「歴史を作ってきた」個人の「自由」の具体例こそが、先に押さえた指示語の指示内容といってよいものである。まとめると、第八段落からこの傍線部に至る流れの中で述べられているのは、まず「歴史の強制力」であり、それに抗し、しかも「歴史を作ってきた」のが個人の「自由」である。その「自由」が「行為、力、声、思考、夢想」と様々な形をとりながら、「痕跡」を残しているのが「歴史」なのである。よって「それらとともにあること」は、そういう「歴史の強制力」に抗した「無数の他者」の「自由」を知ることにほかならず、そういう「他者」に思いを寄せることは、「喜び」もあれば「苦しみ」を感じることもあろう。もう一歩踏み込めば、人の生の苦楽を知るこ

とである。これで傍線部の大半が説明できる。
　残るは、最後の「重さ」である。今押さえた内容から、「他者」が作り上げてきた「歴史」を知り、それを受け継ぐ『重さ』と取ることも可能である。それも悪くはないが、そういう『歴史』のなかに自分もいるのであり、自分も「自由」を持つ以上、結局自分もまた「歴史」を作る存在であるのだから、その『重さ』というところまで踏み込むことができるであろう。とすれば模範解答に示したような、「歴史を作る個人の責任の重み」といった表現が可能である。以上のように、最後の三つの段落の内容のポイントを押さえながら、分解した傍線部の全ポイントを丁寧に言い換えていけば（多少自分の言葉による補充が必要だが）ある程度の解答は可能である。しかし、ここまでの作業は、普通の傍線部の問題に対してのそれと全く変わりがない。（それだけでもある程度の得点が可能なのだから、やはりこういう作業が一番基本であることは言うまでもないが。）要約性という観点から捉えたときに、こういう解答で十分だろうか、という疑問が残る。もう一度今押さえた内容を確認すると、『無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡』という指示語の指示内容と対応しうる内容が実は文中にはまだあったのである。それが第四段落で述べられた「主体性と主観性」という内容である。『行為』や『思考』が、「主体性と主観性」に基づくものであることは明らかであろう。その内容を確認すると、「歴史とは個人の歴史と集団の記憶とその操作であり。記憶するという行為をみちびく主体性と主観性なしにはありえない」＝「出来事を記憶する人間の欲望、感情、身体、経験を超越してはありえない」というものである。「個人」や「集団」が「主体性」をもって「記憶」しようとしたものが「歴史」なのである以上、そこにはそういう「欲望、感情」が「痕跡」として残っているのであり、「歴史」はそういう「主体性や主観性」をも我々に教えてくれるのである。（ナチが大虐殺を徹底的に隠滅しようとした「主体性」をもっていたからこそ、何も残されていないところから我々は事実を暴き出し、その『苦しみ』を何とか思いやり、二度と同じ過ちを犯すことなく「歴史」を作る責任の『重さ』をかみしめるべきだ、という例を挙げれば、この「主体性や主観性」という表現が必須であることがよくわかるのではなかろうか。）文章の流れを素直に前からみれば、まず「記憶」としての「歴史」について述べられ、次に「歴史」と『自由』との関係が述べられているのだから、本文のまとめの位置にあるこの傍線部の説明として、両方の内容が必要であることは当然であるともいえる。「自由」を中心にまとめれば一応合格であるとは言えるものの、この「記憶」における「主体性」まで言及できれば、一層高い評価が得られる問題である。

(六)

　「散逸」がやや難しいかというくらいで、ごく標準的なレベルである。文理を問わず、漢字対策は十分行うべきである。

2008年第1問　解答例

㈠歴史学は、存在の有無を学問的に決められない無限の事象で構成される歴史の領域に依拠することで、初めて学問として成立し発展することができるということ。

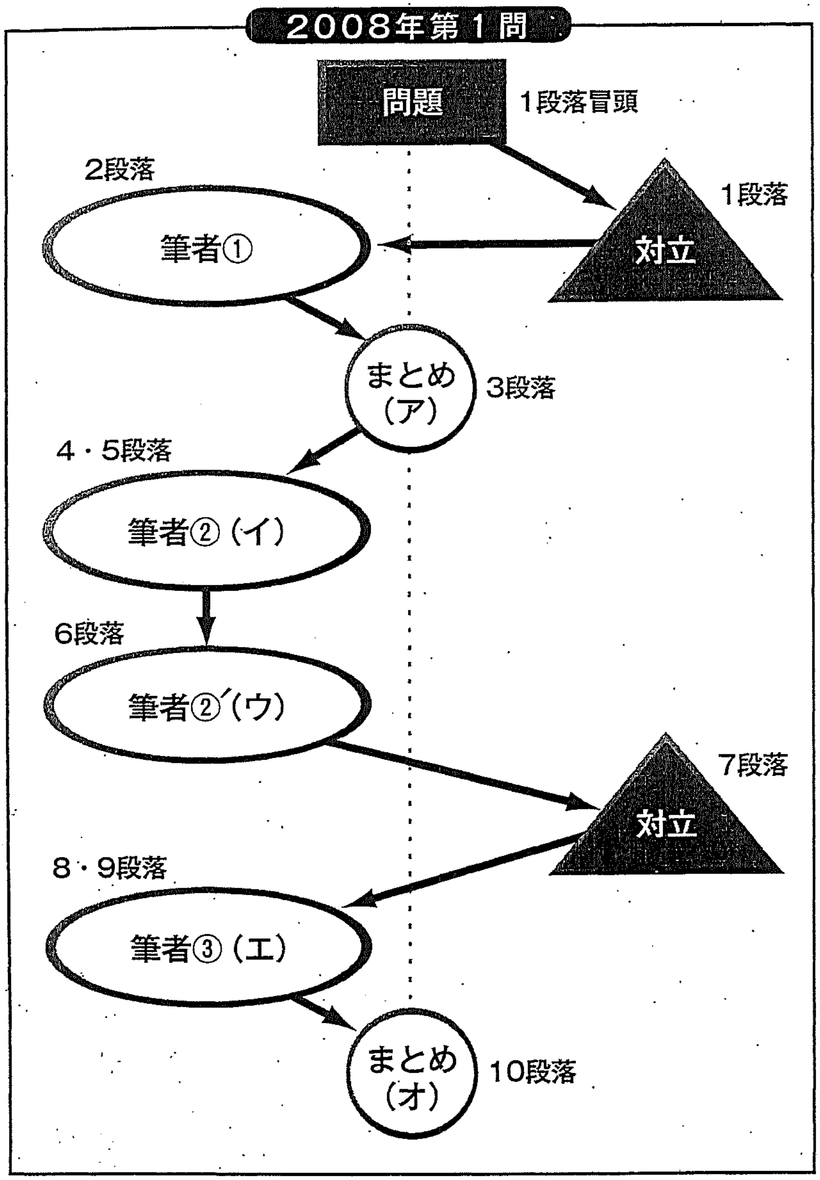
㈡歴史は、各社会の代表的価値観に基づき、記憶の一形態としてその成員の自己像を構成する役割を通じて、無数の記憶同士の抗争の中で生き残った一つにすぎないということ。

㈢人間集団の一定の価値観に基づき記憶が中心化され等質化された歴史と異なり、記憶自体は操作を受けない形態で物質や生命のあらゆるところに存在し、多様な可能性を想起させうるから。

㈣歴史は、個人の記憶を要素とした集団の記憶の集積とされるため、その集団内の個人の生き様を多様な形で決定することになるということ。

㈤人々の記憶の集積である歴史は、中心化される過程で無数の主体の記憶を排除するため、個人が自由に行動し選択しうることで、歴史からの一定の解放をもたらす一方個人を抑圧する歴史を作るという困難と責任を人間に引き受けさせるということ。

㈥a散逸　b超越　c機会　d信仰　e矛盾



■課題文読解のポイント■

「歴史・社会」と「記憶・個人」という二項対立を見つけ出し、全体を統括できたかどうかが鍵である。段落間に接続詞があまり使われず、どのような意味ブロックに分ければいいのか迷うが、最初の3段落で具体例を用いて大まかに歴史とはどのようなものか紹介し、第4〜6段落では記憶としての歴史について語られる。そして、第8段落以降展開される、歴史と「私」の関係は、第4段落の「歴史とは個人と集団の記憶とその操作であり、記憶するという行為をみちびく主体性と主観性なしにはありえない」と対応している。

やはりこの課題文も「所詮」現代文入試の文章であり、何度も同じことを具体例と抽象論を重ね合わせることで言っているだけにすぎない、と思い、無理やりにでも二項対立を貫き読み通す姿勢が大事である。

■解答作成のポイント■

㈠ 使用テク：解テク18「二項対立の対立ブロックの補充」

「**歴史学は、巨大であいまいな歴史の領域に依拠することで、初めて学問として成立し発展することができるということ**」という解答の大枠を作ることができるかが鍵である。**歴史学はあくまで「歴史」学であり、歴史に依拠して初めて学問として存在が成立し、発展できる**、という構造にあるということを見抜かなくてはいけないということである。「支える」は「**成立する**」、「養われている」は「**発展する**」と言い換えている。

解答の大枠ができたなら、「巨大であいまいな」という部分を、より二項対立を明らかにするために、二項対立の対立ブロックを補充する。すなわち、「**歴史の領域が存在の有無を学問的に決められない無限の事象で構成される**」というブロックを付け加えることで、歴史学という学問は、学問的にあやふやな歴史というものに依拠しないと成立し発展できない、という構造が明らかになるということである。

㈡ 使用テク：解テク30「マイナスブロックの処理」

傍線部は第5段落のまとめになっているので、段落全体を通して傍線部を再構築することができたかが鍵である。

あとは、「歴史そのものが…相対的に勝ちをおさめてきた…」をどう言い換えるかだが、「相対的」はここではマイナスの表現であるため、「**生き残った一つにすぎない**」と処理することができれば十分だろう。

㈢ 使用テク：解テク21「比較構文」

「はるかに上回る」という傍線部から、「比較構文」にあてはめれば解答がほぼ完成することがわかる。

注意すべき点は、「ひろがり」と「深さ」につき、記憶と歴史それぞれについて言い換えることである。具体的には、歴史の「ひろがり」「深さ」は、記憶が「**中心化され**」「**等質化された**」ということであり、記憶の「ひろがり」「深さ」は、「**あらゆるところに存在し**」「**操作を受けない形態で…多様な可能性を想起させる**」ということである。

㈣ 使用テク：なし

テクニック化はしていないが、傍線部の言い換えの発想としては、三段論法の補充に似ている。

具体的には、「歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている」とは、「**歴史が～とされるため、強迫的な性質をもつ**」ということ、とブロックを再構築できるということである。あとは、傍線部の直後の三、四文を素材にしてまとめれば完成である。

(五) 使用テク：（解テク15「三段論法の補充」）

まず、歴史が「それらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである」とは大まかに言ってどのようなことなのか、解答の大枠を決める。

「それら」とは、傍線部の直前の「無数の他者の行為、力、声、思考、夢想の痕跡」である。すなわち「**中心化される過程で**」排除された「**無数の主体の記憶**」である。これを再構築して、「**歴史は中心化される過程で無数の主体の記憶を排除するため、喜びであり、苦しみであり、重さなのである**」となる。ここでは、「三段論法の補充」の形式をブロックの再構築に応用している。

そして、歴史は「**人々の記憶の集積である**」というブロックを付け加えて、「まとめ問題」の解答としてスムーズなものにした後、これを原型にして解答の詳細を考える。今のところ、「**人々の記憶の集積である歴史は、中心化される過程で無数の主体の記憶を排除するため、喜びであり、苦しみであり、重さなのであるということ**」という段階まで完成している、ということである。

プラスのブロックである「喜びであり」とは、「**個人が自由に行動し選択しうること**」による「**歴史からの一定の解放**」である。一方、マイナスのブロックである「苦しみであり、重さなのである」とは、「**個人を抑圧する歴史を作る**」ことについての「**困難であり責任**」とでも言い換えればよいだろう。課題文の言葉を引用するなら、「私の自由な選択や行動や抵抗がなければ、そのような自由の集積や混沌（こんとん）がなければ、そもそも歴史そのものが存在しえなかった」のであり、そのような事実に対して苦しみ、重圧・責任を感じさせられるのである。

111

【要旨】　記述された「歴史」は、記述されなかった出来事や可能的事象まで含めた広大な領域の中から、特定の価値観に基づいて選択・構成されたものだ。そうした歴史を、人間以前の物質や生命の痕跡まで含めた「記憶」の一形態としてとらえようとしたのは、歴史の過大な求心力から離脱するためだろう。歴史は個人の生を規定する強制力をもつものであるとともに、個人の自由な選択や偶然の集積でもある。歴史を生きる人間は、無数の他者の生の痕跡に向き合いつつ自らの生を営み新たな可能性を生み出してゆく存在なのである。

【解答】【問一】　歴史学自体が、書かれなかった要素や可能的事象を含むあいまいで膨大な前歴史的領域に依拠して成立しているということ。【問二】　一つの歴史は、その主体である共同体の自己像を構成する代表的な価値観によって中心化され、他の要素を排除する形で生き残った表象であるということ。【問三】　特定の主観性に基づき限定することで成り立つ人間の歴史に対して、地球上における物質的・生命的連鎖の痕跡をも含めた記憶は多様な情報を含んでいるから。【問四】　歴史が、それを形成してきた過去の人々の営みの集積である以上、個人の生に先立ち、それを規定するものになるということ。【問五】　歴史は、共同体の支配的価値観に基づき個人の生を決定づける一方で、偶然や自由な選択の集積として形づくられたものでもあり、その両面の中で生きる人間は、抑圧された可能性や異質な存在に向き合いつつ、歴史を作り出してゆく困難と責務を負う、ということ。（一三〇字）【問六】　a＝散逸（散佚）　b＝超越　c＝機会　d＝信仰　e＝矛盾